

稻妻の唯名的定義と用語「畏敬の念」考

小 山 一 乘

はじめに

本稿のねらいは、巷間馴致の二項すなわち、項「稻妻」の唯名的定義生成と、項「畏敬の念」生成とに聯関する脳の生理過程上の「確信 (assurance)」と「確認 (conviction)」との思惟内的聯関相を根柢的に索めて、畏敬の念生成の宗教的解明・科学的解明を試みる覚書作成が核心である。

平成二十七年学習指導要領一部改正（全面改正二十九年）の「特別の教科 道徳」の内容項目が、周知の如く、視点ごとに系統的にまとめられていて、生涯学習の発達課題に沿うようにして項目が学年進行にともない系統的発展をしていく相が直読直解可能になった設定項目のうちの一つの「感動、畏敬の念」の項に「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」とみえる用語「畏敬の念」設定に関して、賛否の批判が喧しいのは周知事である。

その畏敬の念生成の基層いわゆる存在の危機的状況・限界の状況を語る本来的教育哲学的用語である subject-matter（主体にとってのつびきならぬ事柄^②）として、内容に故事・呪文の「桑原・くわばら」で知られる雷・カミナリを、日常生活上の現象として取扱い、また、史資料上の関連用語を意識的に対象化して取り扱う教育方法に

対して、これを否定的に批判する議論四例（論A～D）をとりあげ吟味し、宗教、科学、農村経済、国民健康保険制度設計背景産子養育制度・児童の福祉問題を、生活科が事とする場面すなわち、家庭生活・学校生活・地域社会生活の各場面の社会事象に視野をゆきわたらせ総合的に考える端緒を得る覚書を作成することが本稿である。

なお、本稿着手の前提として次の基礎的な作業をおこなった。

(1) 「特別の教科 道徳」と併行させて各教科のうち、生活科（家庭と生活、学校と生活、地域社会と生活との各生活場面と根柢との体験化）及び三つの生活場面での社会性の意識的対象化を図る社会科の学年進行に伴う社会生活空間・時間・人間の各間の相関的同心円的拡大・系統的発展の相を明確にする表を作成し、各教科と、先の「特別の教科 道徳」とを横断的に俯瞰する表作成の基礎作業を本稿の前提として実施した（詳細は紙幅上割愛）。

(2) 用語「畏敬の念」に関し、小中間学年年間横断的系統がみられ、「感動、畏敬の念」の項に

小学校低学年…美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。

小学校中学年…美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。

小学校高学年…美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。

中学校…美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めることとみえ、「すがすがしい心を持つこと」がやがて「気高いもの」に気づき「感動する心」となり、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと」へと「転移」させていく。類義語「畏怖」「カシコキ」「畏」「敬」「サカキ」を含め古代及び現代の用例にみえる時代変容に関し、文字学的に渉猟し検討する詳細な基礎作業を行った。（詳細は割愛）

一 宗教的適応の根源的意味を索める議論の俎上にのる「畏敬の念」の教育評価論序

——事実的言明での教授での評価問題、規範的言明での教授での評価問題——

周知の如く、二〇一七（平成二十九）年告示の小学校学習指導要領が、二〇二〇年四月一日より全面实施される。「特別の教科 道徳」となったその「第一 目標」の項で「第一章総則の第一の二の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と示す。

そして「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の項のなかの「感動、畏敬の念」の項において、「第一学年及び第二学年…美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。」「第三学年及び第四学年…美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。」「第五学年及び第六学年…美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。」と系統づけて示されている。

議論の喧しいのは用語「畏敬の念」のいわゆる評価である。「畏敬の念」を抱く事象の取り扱いをめぐる教授概念が単純ではない。「畏敬の念」現象を、事実的言明で行えば、告げる（学習を必要条件としない）。頭だけの理解すら必要としない）か、教える（学習を必要条件とする。頭だけの理解で可）か。しかし、規範的言明で行えば、告げるは問題外であるが、教えるの場合、通常は「行動規範の權威の知的承認と行動パターンの獲得が要求される。」のであり、学習の結果は、いわば知的面と行動的面とが統合されていることを是とし、評価者は、学習者の行動の外面を観て、さらに知的理解の内面を推察して、つまり本来の字義どおりの観察をして、学習習得状況を解釈・評

価する。その際厄介なことが生じる。つまり、行動面では学習が成立しているという証拠が観られないが、知的面では理解していると察せられることがある、つまり、通俗的にいえば、頭ではわかっていると解釈できるので、評価を可とする場合があり得る。要するに、わかっているが、態度には現わしていない、という場合がある。これを是とし可としてしまえば、この教えは、規範的言明での教育ではなく、もはやいわゆる事実的言明で行った場合の教育と同じ事態になってしまう。道德教育における規範的言明による教育のことばの評価上の根本問題がある。

加えて事象「畏敬」「畏敬の念」現象は、事実的現象として観察されることは、事実的言明で、教えられるものではあっても、規範的に、知的承認と規範的行動パターンとを習得するように、つまり、畏敬の念を抱くように教えることが可能か否かは、不可能ではないが、評価の俎上にのせるのは適当ではない。しかし「何(what)」と問う、そして、それが何だかはわからないが、ともあれ「なにかがそこにあるsomething there」という事態は確かなことであり、その正体・得体の解明・定義を試みるが、解明・定義しきれないというまさに言語道断の事態を甘受しつつも、それでもその事態を言語表現せずにはおさまらない人間の、言語という道具を持った人間の性さがによって「何事(watness)」と言語表現して当面の決着をせずにはおられない限界的事態の基層それへの解明に至ろうとする⁽³⁾。当事態を客観的に捕捉することを実現するのは事実的言明での教授で可能である。

それは石津照璽が『宗教哲学の場面と根底』「序」で示している「第一章 宗教哲学の問題と方向」の項で、「一 宗教研究上の前提とその性格」、「二 とくに宗教研究における科学と哲学との連関」、「三 宗教哲学の問題領域」、
 「四 現実生活の機能的連関——状況的な危機とその根底」、第二章 四 呪術の領域と宗教の領域の本質に関する究明——宗教哲学の領域に託せられるもの」と俯瞰していく。そして「第三章 人間存在の構造における宗教の根拠」と、石津は踏み込んでいく。つまり宗教哲学や教育哲学が事とする交叉点(trivium)、だれにも自明な、

Trivium (文法：grammar、修辭学：rhetoric、弁証法・論理学：logic) という三科は、親から教えられなくとも生得的に獲得していて、例えば、原初的な三段論法（弁証法）はいつしか使用し出すと言われる根源的な脳の生理過程の所産である。探索の生理過程の根源の三科の基層から生成される畏敬認識生成論のテーマとなる。⁽⁴⁾

二 史資料にみえる「雷」及び「稲妻」

1 『古事記』で語られる伊邪那美命の屍体から生じた八の雷神

—— 八つの雷とあるが、いわゆるのカミナリでなく威力ある恐ろしい魔物・鬼形のもを指す ——

この用語「雷」はいわゆるカミナリの意味ではない。本文を観ていく。「死者の行く穢らわしい暗黒の世界」すなわち黄泉の国に旅立った妻の伊邪那美命を追ってきた夫の伊邪那岐命が、伊邪那美命に向かつて「還るべし」と促すが、妻は「吾は黄泉戸喫しつ」といい、黄泉の国のメンバーになってしまったので固辞するが、「入り来ませる事恐し」といつて「しまらく黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ」といつて自分の屍体を見にくることを禁止したうえで、黄泉神と相談する旨を述べて殿中に入ってしまった。伊邪那岐命は妻が戻ってくるのを待ったが待ちきれずに、「我をな視たまひそ」と禁止されていた約束をやぶって、「櫛の男柱一箇取りかきて、一つ火燭して入り見ます時」そこにみたのが「うじたかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には壘雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、忸せて八の雷神成り居りき」とみえ、そこには用語「雷」がみえている。⁽⁵⁾

たとえば「壘雷」^(さくいかづち)とは、「物を裂く威力のある雷」⁽⁶⁾との注がみえており、ここにみえる八つの「雷」はいわゆるカミナリの意味ではなく、「蔽」(いか、勢いの盛んなさま) + 「つ」(の) + 「ち」(神霊) の字義からの解釈で、

威力ある恐ろしい魔物、鬼形のものを示すと推察され、用語「雷」の字義の一側面である。

2 『古今和歌集』にみえる用語「稲妻」

秋の田の 穂の上をてらす 稲妻の

ひかりのまにも 我や忘る、——詠み人しらず 『古今和歌集』卷十一—〇五四八 恋歌——

(通釈・秋の田の穂の上を照らす稲妻の一時の光の間ほどでも、あなたのことを忘れることなどであろうことか〔決してありません〕)

ここでの「稲妻」は雷・カミナリのことである。稲の実る今頃には付きものという意味で「稲の夫《つま》」、すなわち稲と雷は夫婦のように一体であることからこのような表現が生まれたとされる。

三 劉琳「日本語歴史コーパス」日本書紀古訓形容詞「カシコシ、サカシ」に関する調査⁽⁸⁾考

「畏敬」の「畏」の古訓形容詞の用例に関し通観する。唐風文化時期までと、菅原道真の遣唐使廢止建議を契機に始動した国風文化時期とを中心に、変移に注目し、史的観点から、古訓形容詞に関して通観しておきたい。

1 劉琳氏による『日本書紀』における「カシコシ」考察・コメント

劉琳氏は『日本書紀』における形容詞「カシコシ」「サカシ」について次のように分析している。

形容詞「カシコシ」は「畏、懼」に、「サカシ」が「賢、哲」などの漢字に附された和訓として用いられている。

漢字の字義を考えると、『日本書紀』における「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」の意味、「サカシ」は「賢明」という意味を表すと推測される。日本書紀古訓の「カシコシ」は「畏怖の意味以外に、「才智のある」という意味も表し、「サカシ」とは意味的に共通な面があると思われる。古代において「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」、「サ

カシ」は「賢明、才能がある」の意味として使われ、二語は意味的に共通な面があることが分かる。

2 「上代以降「カシコシ」と「サカシ」は共通な意味を持つようになる」(劉琳氏)

劉琳氏は「上代以降この二語の意味用法が拡大し、「カシコシ」は「才知、能力がある」という意味を持ち、「サカシ」と共通な意味を持つようになった。「サカシ」の「丈夫で、無病だ」という意味は上代では見えない。」と指摘している。

3 『万葉集』、『古事記』、『日本書紀』における「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」の意味

さらに劉琳氏は次のように記している。

『日本書紀』において、「カシコシ」は「才能あり、能力がすぐれている」の意味をもつ「英才」などの漢語に充てられた和訓として使われる用例も見られる。これに対し、平安仮名文学の『源氏物語』、『枕草子』の用例を見ると、上記の意味以外に、独特の意味用法が見られる。平安仮名文学では、(中略)「カシコシ」が表す「畏敬」の意味が軽くなった。また、大切にする、慎重の意味を持つようになった。

(前略)「サカシ」の意味にはプラス評価とマイナス評価の両方ある。上代の文学作品の用例や『日本書紀』古訓としての意味はプラス評価である。平安時代の「サカシ」は、判断がしっかりして物に動じないことをいった。自分自身の内に蔵する力、判断力によって事を決めて、その結果に自信をもっていることを表す。

『枕草子』の「さかしきもの」の段は、短い内容であるが、「サカシ」は四回使われ、そのうちの三例が「身分の卑しい者の小ざかしいこと」についてのマイナス評価である。同じ意味用法は『源氏物語』にも見られる。

劉琳氏によれば、「サカシ」にはプラス評価とマイナス評価との両義性が看取されるという。ならば、「サカシ」と「カシコシ」とは上代以降「共通の意味を持つようになった」との前提に立脚すれば、「サカシ」と同様に「カシコシ」にもプラス評価とマイナス評価との両面がうつしとられている可能性が生じる。「畏敬の念」の用語「畏」の意味の両義性論に聯関する要所でもある。

劉琳氏は、『日本書紀』の訓点本及び平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ」の意味用法について、収集した用例を用いて考察を行っている。「平安時代以降「カシコシ、サカシ」の意味用法は拡大し、上代や現代よりはるかに意味用法が広い。」と分析している。(詳細な分析対象例文は割愛)

4 「畏敬の念」に係わる「カシコシ、サカシ」の義の時代的差異

八九四(寛平六)年遣唐使に任ぜられた菅原道真(八四五〜九〇三)が、その遣唐使制度の廃止を建議した。菅原道真は醍醐天皇の時、右大臣となったが、九〇一年(延喜二)藤原時平の讒言により大宰権帥に左遷され、同地で没。安楽寺に葬られたが後に、その跡地に太宰府神社(今の太宰府天満宮)が創建される。「遣唐使の廃止によって唐文化の影響が弱まると、仮名文字・女流文学・大和絵・寝殿造・浄土教芸術などとして開花した」(『広辞苑』第六版、「国風文化」の項)。国風文化の発端は、遣唐使廃止であり、それを策定したのは菅原道真である。留意すべきは、生身の人間が、祭神として神社に祭祀された嚆矢は菅原道真であるとされる。モデルになったのは、釈迦の生涯と仏像である。生身の釈迦が覺者となり入寂して仏像が祀られて崇拜されている実態から、菅原道真であっても、仏陀祭祀を範として、神社に祀ることが不可能ではないはずだ、との判断がなされた。爾後、折に触れ、人物が神社に祀られる習わしが形成された。

道真影響下の国風文化のコンテクストのなかで、上記「カシコシ、サカシ」が展開し、「それは上代や現代より

もはるかに意味用法が広い」という劉氏の指摘は、史資料を通時的・共時的にみていく際には注意が要ることへの警鐘である。換言すれば、上代や現代は意味用法が狭いということになる。ならば、狭い意味用法下の現代の漢字・漢語「カシコシ、サカシ」の意味用法でもって、悠久の過去から道真の太宰府所縁の元号「令和」の現代まで、「畏敬の念」に係わる「カシコシ、サカシ」を一律に推し量ることに注意が要る厄介さが生じる。

四 用語「畏敬」に関する定義（『広辞苑』・白川静『字通』・『新英和中辞典』（研究社））

1 漢字・漢語「畏」のプラス面とマイナス面との両義的意味の使用例確認

上記の「用語「畏敬」に関する辞典（字典）概観」からわかることは、「畏」字の用例に、「い・あい【畏愛】キ・ウヤマイ親しむこと。」（『広辞苑』）がみえる。同じく、「【畏愛】い（る）あい おそれ愛する。（左伝、襄三十一年）君に君の威儀有るときは、其の臣畏れて之れを愛す。」（白川静『字通』）がみえる。「【畏慕】いほ 敬慕」（白川静『字通』）ともみえる。これらは、「畏」に付加された造語によっては、「畏」の意味性格にはマイナス評価ではなくプラス評価が表れているといえよう。「畏」が漢字・漢語として、付加した漢字・漢語に対して、プラス評価面と、マイナス評価面との発生があることへの注意が不可欠と思われる。

2 「畏敬は、尊敬と恐れの間錯した感情」（『新英和中辞典』、Aweの項）はプラス評価とマイナス評価

『新英和中辞典』での「Awe」の項：名詞不可算名詞 畏れ、畏怖、畏敬は「尊敬と恐れの間錯した感情」と。音節awe 発音記号・読み方 /ə/ with awe 畏れて、畏怖して。動詞 他動詞 1〈人を〉畏れさせる、畏敬させる。be awed by the majesty of a mountain 山の偉容に畏敬の念を催す。 2〈+目的語+into+（代）名詞〉〈人を〉畏怖せしめ〔…に〕せせら。 He was awed into silence. 彼は威厳に打たれて沈黙した。

【語源】古期英語「恐怖」の意・形容詞 awful

【筆者小山コメント】「畏敬は『尊敬と恐れの交錯した感情』との定義がある。プラス評価面とマイナス評価面を持ち両義的である。英語の辞典だが、英米比較思想・比較文化的分析が基層にあると穿たれるが、畏敬の両面を見事に道破している。「畏」の意味性格がいわばプラス面とマイナス面とを習合させる両義的意味性格を語る定義例と指摘したい。

五 「畏敬の念」設定否定論について

畏敬の念を論じる際に雷に対する恐怖、畏怖の念が論われることが知られる。恐怖感（対象の正体は分かたが対処方法が不明ゆえの適応不能）或いは不安感（対象の正体が不明で処置以前の適応不能）を抱いて種々に適応・順応、或いは反応してきた洋の古今東西の人々の日常生活上の宗教・宗教的経験、宗教教育の実態調査をおこなった調査の労作で知られる菅原伸郎の論考から、筆者（小山）が気になる箇所を摘記し、論A（論Dとして）に掲げた。綿密な菅原氏の姿勢を知るゆえに筆者には、摘記の限界への恐怖と不安はあり、批判は敢えて承知である。

1 (論A) 「畏怖の念」は科学が未発達な時代の宗教観⁹⁾考

(論A) 「畏怖の念」というのは、科学が未発達な時代の宗教観ではないか。雷とか伝染病とか日蝕とかをおそれおののいて、そこに神を見たのだ。あえていえば呪術とかシャーマニズムの世界ではないかと思う。よくよく考えてみると、自然への驚きとか、私がここになぜ在るのかという実存的問いは、そもそもが畏怖とは関係

ないはずだ。⁽¹⁰⁾

右記引用は「畏怖の念」は「科学が未発達な時代の宗教観」とみる。実存的な問い畏怖とは関係ないはずだとの見解は筆者とは乖離が大きすぎる。ただし「未発達」の段階は否定的に見なしてよいのだろうか。そのように上から目線で見なすのは妥当であろうか。それを経て次へと発達していくのではないか。雷に対し、素朴ながらその得體は「何だ」と思惟しても、からくり・正体の理解が及ばない場合には、得體が知れなく心理的には不安に陥るであろう。それでも「はじめにロゴスありき」の性をもつ人間は、その得體不明事態の「或何だか」「何事」とでも言語化せずにはおられない。そうしておいて、その不安或いは恐怖を動機として、正体の解明にあれこれと向かう。或る過程で、いまだに、対処・処置不能なら雷は「恐怖」の対象となろう。そこには「畏怖の念」が生じよう。しかし、それでも「何とか解明を」指向しよう。そして、フランクリンが登場して解明し、避雷針設置対策が発明されるに至るのである。不安・恐怖の脳の生理過程は、脳科学や基督教バイブル教義が示唆する「確信と確認」の聯繫の思惟は自然科学の発達の過程を描写しているとの松本元（脳科学）の指摘は真実語である。

2 (論B) 『旧約聖書「申命記」』は「自然への驚きイコール神の信仰ととらえてはいけない、と戒めている。」考(論B) 畏敬とは「敬う」という意味では尊敬・尊重と「畏怖」、すなわち尊い者を傷つけたり踏みにじったりすることを禁じる気持ち」となっている。「指導にあたっては自然や芸術作品などに出会ったときの「感動や畏怖の念、不思議を大切にし、「有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心」を育てる」と書かれている。

「畏敬の念」を教えるとは、実際はどう行われているだろうか。学校を回って先生と話をしたり、副読本とか授

業研究書を見ていくと、大抵は「畏敬の念」と言っても、自然への驚嘆を教えているようだ。たとえば、天の川は美しいとか、サナギが蝶になる瞬間を見て感動するとか、そういう話が多く載っている。これは大事なことだと思う。環境問題とか生命倫理の指導には向いているとも思う。しかし、こういう驚きの感情からは、超越的存在とか救いとか罪とか、慈悲という、宗教の本当の問題にはまだまだ距離があるのではないか。旧約聖書「申命記」には「天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見て、これらに惑わされ、ひれ伏し仕えてはならない」という言葉もあり、自然への驚きイコール神の信仰ととらえてはいけな、と戒めているはずだ。

もちろん道徳教育の副読本には、命懸けの冒険をした人とか、肉親が病気になったとか、人生の危機に出会った主人公の祈りの気持ちとか、大いなるものへの関心という物語がないわけではない。しかしどこまで踏み込むか、先生たちも苦労しているようだ。

以上に見えるように、菅原は曰く、「サナギが蝶になる瞬間を見て感動するとか、そういう話が多く載っている。これは大事なことだと思う。環境問題とか生命倫理の指導には向いているとも思う。しかし、こういう驚きの感情からは、超越的存在とか救いとか罪とか、慈悲という、宗教の本当の問題にはまだまだ距離があるのではないか。」と菅原は述べている。しかし、筆者が講師として現場で関わった幼児教育研究者や幼稚園教諭、保育士の子供観について共通しているのは、ピアジェが指摘する幼児の思考に見えるアニミズム的思惟・直観による洞察の奥行・深さに身震いがあるということ。筆者も同様の体験と経験とがある。

しかし、この菅原の論Bはマイナスの評価的である。サナギが変態して羽化し蝶になる変態のメカニズムに着目して、生命の原型にせまる学習動機付けは十分可能であると筆者は思う。進化論の論議も不可避であろう。ゴキ

ブリはゴキブリなりに進化して今の姿がゴキブリの最先端的発達状態なのである。いつから、あらゆる生命体は、どのようにして枝分かれしてきたのかを根源的に問う学習指導は不可能だろうか。筆者は可能だと思ふ。

生命倫理を語る場合には、宇宙船地球号上での、生命誕生してからの約三十七億年余の経緯を念頭に置かないと語り尽くせない。人間も、赤白の二滴が母胎内で受精して、細胞分裂を繰り返して、脊椎動物の爬虫類の形体の過程を経て、人の形に形成されてくる。人体形成して産声をあげ肺呼吸を始動する。受精から出生までの過程は、子宮内で、生命発生からの三十七億年余の発生の過程を経過して、産声をあげるに至る事態に傾注が要る。

さらに菅原は、宗教における重要な疑問態・指示詞「何・恁麼・什麼・(what)」・「何事・恁麼事・(whaness)」に通底する西行の「何事のおはしますか 知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」を引きながら次の論Cを述べる。

3 (論C) 「何事のおはしますか 知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」(西行の歌)

「何事もおわしまさぬと知りながら 世の人並みにぬかずきにけり」(仲吉朝助の歌、本歌取) 考

仏と神の区別がつかない先生も多いのが現状だから。西行法師が伊勢神宮(註)に行った時、「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」という有名な歌を詠んだが、何だか分からないということでは学校では教えられない。現実に学校の先生たちはどうやっているか。

「何事もおはしまさぬと知りながら世の人並みにぬかずけりけり」という戯れ歌があるそうだがそんな気持ちではないか。(略) 学習指導要領で言っている「畏敬の念」とは何か。大拙さんに言わせれば、それは「不安の心」ということになるだろう。「人間の力を超えたもの」にしても「力及ばずのところ」を指しているのではないか。

そうであれば、不思議なものを無批判に畏怖することを学校で教えていることになる。「畏敬の念」の指導は、呪術の世界に通ずる要素があるのではないか。あえて言えば、カルトや迷信に対する批判力を削ぐことにならないかと心配している。⁽¹³⁾

伊勢神宮ではなく正式名称は神宮であり、強いて言えば伊勢の神宮である。巷間、用語「伊勢神宮参り」よりも用語「お伊勢参り」が汎用されている。「伊勢に鎮座する神宮」が巷間の宗教地理認識であり、伊勢といえば神宮と同義語化している。伊勢といえば神宮という捕捉から熟して用語「伊勢神宮」が馴致されている。同様に考える脳の生理過程から、出雲といえは大社という捕捉が熟しているので用語「出雲大社」が馴致されている。なお、それぞれの神宮史原初と大社史原初をめぐる唯名的定義問題は本稿の主たるテーマではないので他の機会に譲る。論Cの言説は根深い広範な問題を孕んでいる。

「何だか分からないということでは学校では教えられない」との否定的批判には一理あると思うが、でも筆者は首肯しがたい。「何」は宗教の言葉の疑問態「何」の宗教哲学的考察を抜きにしては語れない根深い詠歌である。ウィリアム・ジェームズ (William James) が提起する「用語 what」や「用語 whatness」がある。またジョン・デューイ (John Dewey) が提起する「用語 religion」・「用語 the religious」の論議も不可欠であろう。⁽¹⁴⁾看過できないのは「戯れ歌があるそうだが」といって「何事もおはしまさぬと知りながら世の人並みにぬかづけりけり」と引用している。この歌は、大城立裕氏が伊勢の神宮の参詣の仕方について、仲吉朝助のこの歌を引用し比較させて「伊勢の神宮にしても二つの対照的な詣で方がある……」(琉球新聞、一九八八(昭和六十三)年四月十四日(木))として、西行の歌と仲吉朝助の歌とを対照させて紹介した歌である。「何事」の根源的な解釈のもとに、沖繩有縁の方からする

意味深長にして根源的でしかも逆説的に「何」から「何事」への認知の原初を問う歌と解し得よう。単なる「戯れ歌」と解することを許さない厳しい真摯な「本歌取」を擬したレトリックだと筆者は理会する。想起するのは、禅宗の周知の「是れ什麼物か恁麼に來る」を想起するが詳細は他の機会に譲る。¹⁵⁾

4 (論D) 「よくわからないまま拝んできた」考

そこにどんなことがあり、どなたがおられるのかはわからない。が、ともかく、ありがたさと、恐れかしこむ気持ちで一杯になって、涙がこぼれてしようがないと、歌ったのです。仏教のお坊さんが、神道の神社に来て、このような気持ちになったというのです。それはまさに、「見ることができない神」に対する崇敬の気持ちでした。日本人は昔から、「見ることができない神」を拝んできました。神様を拝んできたものの、その「神」がどういうお方なのか、よくわからないまま拝んできたのです。¹⁶⁾

この論Dに対しての解釈は十分な注意が要り、皮相的な解釈は禁欲すべきと自戒はする。しかし、仏者が神社で涙した事実を、菅原は捕捉しているのだが、神仏習合の根源的生成・機微を看取る論いは不可能というのであるか。この指摘は非常に深刻なsubject-matter (主体にとってのつびきならぬ事柄) である。教育哲学上、スペルのハイフオンは、interest, something between child and matter, something there という意味をもち、或る対象への関心の脈絡化を意味し、根柢は深く刻まれ聯関している。よく分からないという主体subjectにとって或る事柄matterが親（か）に切迫してきた状況である。「分からないと自覚している」自分を自覚している自分なら、メタ思考がはたらいっているから、発達developmentが担保される。しかし、論者は次のようにのべる。

日本の公立学校での道徳教育を見て、それぞれに限界があると思った。それらを二十一世紀はどう乗り越えていくか。あえて言えば、宗教にある迷信的な部分、と言えば、お叱りを受けるかもしれないが、そういう要素を排除した「根源的な部分」をまず大事に教えることだ。あえて言えば「根源的な目覚め」ということであり、それを目指して、「宗教的情操教育」というよりは「根源的情操教育」に取り組むことができないだろうか。そんなことを提案して、一回目の話を終わることにしたい。

菅原の論Dは、宗教の定義論からの根源的論議の余地が少なしとしない論であるが、「根源的な目覚め」は根源的な「疑問態」「何」「問」と表裏ではなかるうか。端的に敷衍すれば、「問」の中に「回答」「解答」が潜在しているといわれる。意味深長である。このような考えからは、うえにみた、論Aから論Dは、根源的疑問態の生成そのものの問題に根ざす哲学問題を、内容面から、方法面からもなされた、問題提起ではあると筆者は受けとめる。だが筆者は決して「戯れ歌」などと捕捉するのではなく、真摯に歌の本来の意味での心地しんちに思いを遣りそこから「根源的情操教育」の成立基盤を考えるところという論・提案ならば、筆者は論Dに首肯する。筆者は既に昭和四十四(一九六九)年以來久しく考察してきたことであり、肯定的に批判し後の論の展開を注目したい。

六 科学的思考と宗教的思考との隣関性・根源性

1 「信仰」(新約聖書の定義)における「確信」・「確認」の自然科学的思惟構造展開からの検討(再考)
論Bで、『旧約聖書』「申命記」は「自然への驚きイコール神の信仰」とらえてはいけない、と戒めているはずだ。

との菅原の言説をみてきたが、人間が、そのようなことに対応していく人間の脳の働きについて、松本元（脳科学者）は、「科学と宗教——脳からみた宗教——」と提題して新約聖書に注目し、科学的思考と宗教的思考との連関性・根源性の語りとして「確信」と「確認」とを論う次を指摘している。すなわち、

信仰とは望んでいる事柄を確信し、未だ見ていない事実を確認することである。 “Now faith is assurance of things hoped for, a conviction of things not seen.”（『新約聖書「ヘブル人への手紙第十一章第一節」』）

「脳は確信すること（でフルパワーを発揮し、この結果脳はすばらしく活動し・発展する。」。自然科学の発展の紆余曲折・試行錯誤の歩みを描写するものである。

松本によれば、assurance（確信）は仮説を醸成し、conviction（確認）は検証を醸成する⁽¹⁷⁾。

「確信」には発達の多様な過程がある。必然、発達の過程に応じた多様な「確認」がある。その都度都度の過程に対して、「未発達」だと決めつけることはこれを誰が認めているのだろうか。

2 「稲妻」の唯名的定義の生成基盤を出雲の高校生が解明（平成二十八～二十九年）

——稲と妻との関係を検証——怖いがり難い・おそれとうやまいとの同居・葛藤的

昔から巷間「雷の多い年は豊作になる」との伝承があり、かつて宮沢賢治が岩手県立花巻農学校教員時代に「カミナリと農作物の出来具合について何らかの関係がある」と洞察し、雷と作物の出来との関係について研究していた。宮沢賢治の研究のことを知った平成の世の出雲の高校生（池田圭佑君（平成二十八年度現在十八歳）、松江市の開星高校在学中）が、それを確かめてみようと思つて実験をした。カイワレダイコンと放電装置を使用して取り

組み、「雷を受けると植物は成長する」との実験結果を得た。学校にある実験用の放電装置を使用し、落雷と同様の状態を作りだし、カイワレダイコンの成長の様子を調べた。種子に五十秒間放電してから育てた種子は、放電しなかった種子に比べて成長が約二倍もはやくなることを発見した。さらには育てるための水道水にも、放電させた水を使用したところ、芽の伸びが二倍になるという結果を得たという。なぜそのような結果となるのかを、放電した水を分析したところ、通常の水に比べて「窒素」の量が一五〇%になっていることを発見した。窒素は肥料の三要素の一つである。

この研究成果は学会誌に掲載され、専門家からも評価を受けた。⁽¹⁸⁾ 古来巷間馴致の「稲妻」という言葉の由来を科学的に証明することに成功した。

この結果を、プラズマ・核融合学会が主催する平成二十八年度の第十四回高校生シンポジウム「科学とプラズマ」に応募し、平成二十九年八月に九州大学で行われたシンポジウムで成果を発表し最優秀賞を獲得した。産経新聞社に対し、京都大学院エネルギー科学研究科の岸本泰明教授は「種に直接放電することで成長が促進される原因は不明としながらも、『放電によって空気中の窒素が水に溶け込み、カイワレ大根の成長が促進されたことを実験で突き止めた点は素晴らしい』という。

古くからの農耕従事者間での伝承の「なぜ雷の多い年は豊作になるのか」という疑問に対し、「窒素の増加により豊作となる」といわれ、稲作と稲妻・雷と密接な関係性が解明されたのである。日本の国土で雷の多い栃木県や埼玉県には随所に雷神社が散見される。雷は恐怖だけでも、その結果、稲などの農作物の出来がよい現象があるので、畏くも有難くもある。桑原・くわばらと避雷呪文を唱えつつも、反面、稲・米の増収をもたらす雷は有り難くもあり、雷への適応の心理状態は正に、葛藤状態で、巷間の語りの「河豚は食いたし命は惜しし」や「河豚食う

無分別、河豚食わぬ無分別」をも彷彿とさせられる。

まとめ

このように「或る何か・何事か」があるはずだと確信 (assurance) し、それを確認 (conviction) して「こうとする脳の生理過程は、「本質的には、目的を達するための中途的な手段として自身を規定してはいないといわなければならぬ」⁽¹⁹⁾」のであるから、未発達・発達の評価は慎重であるべきことが教訓としてある。未知事項がひよっこり出現する可能性が否定できないから。もちろん呪術の議論があることは周知事である。呪術について『広辞苑』(第六版)は「呪術」:(magic) 超自然的存在や神秘的な力に働きかけて種々の目的を達成しようとする意図的な行為。あらゆる社会に見られる。善意の意図による白呪術 (white magic) と邪悪な意図による黒呪術 (black magic) とに分けられる。また専門の職能者に限られる呪術から、呪術とは明確に意識されていない行為まで多様である。「師」↓邪術↓妖術」と定義していることは周知事である。

以上みたとおり、「畏敬の念」は、プラスの評価面とマイナスの評価面との両義的意味性格のあることに一顧が要ると思う。「雷・電・稲妻」が人間の心地にもたらす恐怖・不安というマイナスの畏^{おそれ}の側面がある。他面「雷・電・稲妻」が大地にもたらす・増収・豊作というプラスの恵みの側面がある。人々は「心の大地」に、「おそれ」を生成しつつ、同時に、同じ「心の大地」に「うやまい・おがむ」情理を生成する。同居する「おそれ」と「うやまい」とを止揚する「大きな心の大地」の装置によって習合的な用語「畏敬」が醸成される事態だとの穿ちを筆者は禁じ得ない。農耕空間の村落共同体の杜^{もと}に鎮座する雷神社・雷電神社等が建立される由縁は、避雷祈願と豊作祈願との両義性を帯びている「聖なるもの」と看取されまいか。

松本元の論にしたがえば、脳の生理過程は、雷に何かの作用を、外側から観て、その見えざる内面を推察し、実念的に稲の豊作をもたらす作用を推察しようとする。「何か？」と問を發し、当初、因果関係が説明できないが、とにかく、「何だか」「何事か」が横たわっていると「確信」し、いろいろあれこれ「念・おもい」を巡らして、あれかこれか、そうか、こうかと「確認」を繰り返す。過程的であれ結果的に、「いな・ずま【稲妻・電】ツマ、「稲の夫つま」の意。稲の結実の時期に多いところから、これによって稲が実るとされた」のだが、その唯名的定義の成立基盤が解明されるに至った。

畏れ・怖れ・恐れの対象への関心、Eitetsuから、稲、稲作、稲妻とコンテクスト化され、自ずと、その本質がテクスト化され、「特別の教科 道徳」への教材化・subject-matter化の走路となる。

実念的に觀察して事柄を言語化し造語された「稲妻」は、「おそれとうやまいとの交錯した情理」が造語したものと見えまいか。端的に言えば、「稲妻」は、プラス評価面とマイナス評価面とが習合したものと考えられよう。

畏敬の念はプラス評価とマイナス評価との両側面・両義的意味性格をもつ根源的思惟情理に根差すといえまいか。「特別の教科 道徳」は教科としての知識体系を帯びるので、他教科と接続し得る。同時に宗教的情操とも融合する。東京都台東区浅草寺の風雷神門（雷門）があり、風神・雷神の像を祀る。門に向かって、右側に風神、左側に雷神がみえる。東京浅草寺の修学旅行の際にも、総合学習的に「雷」を理科的に取り扱い、菓子「雷おこし」で五穀豊穡の農作物への興味付けをし、社会科五年生の産業・農業学習の「稲作・米づくり」で粟・粟飯を考えさせ、古都京都の深草へと地理的俯瞰をさせる。²⁰⁾「考える道徳」、「議論する道徳」と併行して、「考える農業」「議論する農業」、全世界の火山噴火に連なる浅間山噴火降灰による東北方面の「天明の飢饉問題」・「雨にも負けず、風にも負けない」農作物育成・農業経済の原風景下、史上の国保の源流の定礼のさらなる背景となる産子養育にも聯関する稲作・稲

妻のカリキュラムマネジメントの構築が可能となる。⁽²⁾

註

(1) 道徳科と略称するが、これは決して免許教科「教科 道徳」ではない。決して、教育職員免許法、同法施行令、同法施行規則等に定める免許教科群に位置づくものではないことに相応の留意が要る。巷間、マスコミ等の醸成する一般的通念に陥らぬように特段の注意が不可欠である。今次の「特別の教科 道徳」は、従来の「道徳教育」と、語弊を恐れずいえば「免許教科 道徳」との中間に、位置づくと筆者は考える。「免許教科 道徳」ならば、その「道徳」の教育職員免許が要る。用語「特別の教科 道徳」と用語「教科 道徳」とは教授概念上明らかに異なると筆者は解する。略称に引きずられて安易な教科解釈をしてはならない。特化された免許状がないことのゆえに「特別の教科 道徳」なのである。

(2) J. Dewey, *The school and Society*, (宮原誠一訳『学校と社会』、岩波文庫)、『*Democracy and Education: an introduction to the philosophy of education*』(松野安男訳『民主主義と教育』(上)(下)、岩波文庫、岩波書店、一九七五年)

(3) W. ジェイムズ (榊田啓三郎訳)『宗教的経験の諸相』岩波文庫上、一九六九年、九〇～九七頁。William James, *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, 1902, A MENTOR BOOK, Published by THE NEW AMERICAN LIBRARY OF WORLD LITERATURE, INC, 1958, pp.68-75.

(4) 石津照塵『宗教哲学の場面と根底』創文社、昭和四十四年。

(5) 次田真幸全訳注『古事記』(上)、講談社学術文庫二〇七、二〇〇四年、六〇～六五頁。

(6) 前掲『古事記』、六十五頁。

(7) 八代集・二十一代集の第一。勅撰和歌集の始まり。二十卷。醍醐天皇の下令により、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑撰。九〇五(延喜五)年または九一四(延喜十四)年頃成る。六歌仙・撰者らの歌約千百首を収め、その歌風は調和的で優美・織麗。真名序・仮名序がある。当初、「続万葉集」といった。『古今集』。

(8) 劉琳著「日本語歴史コーパス」日本書紀古訓形容詞「カシコシ、サカシ」に関する調査、第八回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、二〇一五年九月、国立国語研究所。「日本語歴史コーパスコーパス(英: corpus)」とは国立国語研究所が開発したもので、「言語を分析するための基礎資料として、書や言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの」である。関連URL「日本語歴史コーパス」<https://chunagoninjl.ac.jp/cj/>

- (9) “Reverence” Revisited, 菅原伸郎 Nobuo Sugawara 基督教研究 第六三 卷第二号。
- (10) 菅原前掲稿。
- (11) 堀 七蔵 (著) 『児童生徒の疑問の調査研究』、福村書店、一九五九年、図参照。
- (12) 「伊勢神宮」とは伊勢にある神宮の俗称で、正式名称は「神宮」。同様に、「出雲大社」というのも俗称で、正式名称は「大社」。すべて固有名詞の取り扱いは厳かであるべきで重要である。なお明治維新の神仏判然令による神仏分離等の宗教行政上の混乱の埒埒・紆余曲折の経緯が明らかにするところからすると、神社史の唯名的定義をめぐると論議は難しい。『古事記』研究者の三浦佑之は通説上の、出雲のいわゆる大國主故事・記事を検討したうえで、大國主がもてなされたとする見解と、逆に、大國主がもてなしをしたとする見解とを対比して、そこに全くの逆の政治的力学関係のダイナミズムを看取している。それをめぐっては、江戸期の本居宣長の『古事記』研究上の大國主問題を論じるが詳細は割愛する。神社史上にみる日本の原風景問題が浮上してくる。論Cの言説は根深い広範な問題を孕んでいる。
- (13) “Reverence” Revisited, 菅原伸郎 Nobuo Sugawara 基督教研究 第六三 卷第二号。
- (14) 拙稿「何・不可思議・何事・畏敬の念——宗教育批判論議の思考方法批判——」、『日本仏教教育学研究』第七号、平成十一年三月三十一、二〇〇～二二四頁を参照されたい。
- (15) 拙前掲稿「何・不可思議・何事・畏敬の念——宗教育批判論議の思考方法批判——」、二〇〇～二二四頁。宗教育批判論議の思考方法を、記号論理学での真理値分析を行った。「畏敬の念」の教育は特定宗教や宗教的世界観と結びつくという論理は、個体変項にかかる限量記号の指定が適切でない。曖昧である。筆者は「真理値分析で示唆されることは、端的にいえば、『畏敬の念』の教育は特定宗教や宗教的世界観と結びつく」という推論の仕方は、常に、真だと限らない。総じていえば、真偽不定の場合があるから」と論じた。「何」から「不可思議」から「何事」へと至る軌跡を追体験的に考える意味を考察した。詳細は割愛する。
- (16) 「web 宮司の論文」。
- (17) 松本 元 『愛は脳を活性化する』(岩波科学ライブラリ42、一九九六年、参照。放送大学講義参照。
- (18) 二〇一七年四月一日、産経新聞。
- (19) 石津照璽 『宗教経験の基礎的構造』、創文社、昭和四十六年、一六四頁。
- (20) 深草の少将と、小野小町との悲恋物語も知られる欣浄寺がある。
- (21) 拙稿「国保の源流「定礼」制度創設背景の児童福祉「産子養育」管窺」(駒澤大学『仏教経済研究』第四十八号、駒澤大

学仏教経済研究所、平成三十一年五月）を参照。